

古代インドの医療と現代日本の医療

杉田 暉 道

驚異的に栄えた古代インドの医療の実態と衰微の原因を知ることは、多くの問題をかかえている現代日本の医療の進むべき方向を示唆するものが多いと考えて検討を行った。

まず宇宙と人間との関係については、人間は大宇宙の縮図としての小宇宙であると位置づけた。したがって大宇宙と人間は地・水・火・風の四元素（後には空を加えて五元素となる）の同じ物質から構成されていると考えた。この考えはタントラの思想が発展したものである。ついで人間とは具体的にいかなるものであるかという点、肉体で構成されている。そしてこれは、先の五元素の変化したものにすぎないと、医師は考えた。この見解は当時においては画期的な進んだものであった。

病因については、四元素のバランスがくずれた時に発病するとし、それぞれを風病・火病・水病・雑病（地病）と名づけ、各疾病には百一種あるので計四百四種の疾病が存在するとした。治療の根本は消化を整え栄養を良くすることであった。沐浴、硬膏、燻煙、温蒸法、吸入、含嗽、灌腸、点滴、生薬、塗擦、瀉血等の治療が行われ、肥拌療法、減食療法も重視された。植物性薬剤の種類や量が豊富なことは、古代インドの医療の特色であるが、その

根底には人間と宇宙とは一体であるという世界観にたち、すべての植物はすべて医薬になりうるという思想があった。さらに注目すべきは外科的治療の進歩した技術であった。各種の小手術は勿論のこと、開腹術、膀胱結石摘出術、造鼻術も行われ、かなりの成功を収めていた。

このように進歩していた古代インドの医療が衰微するにいたった原因は大別して二つあげられる。一つはバラモンの執拗な医師に対する非難である。バラモンは自分達の階層を頂点としたカースト制社会を作りつつあった。しかるに医師の発言と行動は、上記のバラモンの計画と実行に危機感を与えた為に、医師を合法的に一千年間にわたって非難をした。この為に医療を行う者はもつとも下層の不可触民の階層になり衰微してしまつた。もう一つの原因は、病因を五元素の不調によるという説から三ドーシャ説に変えた。病因の科学的な考察は不能となつてしまつたが、バラモンの非難をかわすことはできた。

以上の考察から驚異的な発展をなした古代インドの医療の根底にあるものは、人間は大宇宙の縮図であつて、自然と人間は同一であるという思想であることが明らかとなつた。現在の日本の医療は、対象を客観的に把握し、分析を行い、客観的な評価を行う方法で治療が行われている。しかしこの方法ではこれからの疾病の治療には不十分であることが次第にわかつてきた。ここにおいて古代インドの医療において行われた、人間を全人格的に把握し、多元的な価値観を持った治療法に大いに注目する必要があることを強調した。